

オピニオン

「イルカ主義者」(つげ)

だが、日本人はそうではない。これにはふたつの大きな理由があると思う。そのひとつは、待てば

去る二月二十九日、長崎県豊後市で、イルカ保護を主張して来島した米国人運動家が、漁民が捕獲したイルカを囲った養魚場の網を破り、イルカを逃がすという事件が起きた。警察は、犯人の「米国地球共存会」所属、デクスター・ケイトを威力業務妨害の容疑で送検するという。

この事件でいくつか気になったことがある。その第一は、他の犯罪の場合には、容疑段階で容疑者の敬称を剝奪し、呼び捨てにするマスコミ(注・当時)が、このイルカ事件の報道に限り、「ケイトさん」と「さん」づけを続け、「犯人」という言葉にもわざわざ括弧をつけたりして気を遣っていることである。

昭和正論座

ケイトがどんな主義主張を持っているかというと、日本は法治国家であり、法を犯して漁民の網を破った以上、かれは犯罪者としてきちんと取り扱われなければならない。

第二に、ケイトが犯した犯罪は、欧米人がとくく犯し易い誤りや犯罪の小さな典型例だということである。その厳しい地政学的条件、連続する対外戦争の歴史、一神教の宗教基盤などにより、欧米人は特定の「主義」に熱狂し易い性質を帯びている。彼らは、自分たちが正しいと信じたことを、全世界が普遍的に承認すべきであると単純に思い込み易い性向を持っている。彼らは、自分たちの価値観や

「イルカ主義者」の非人間性

近年の研究では、幕藩体制は農民の国民は、自分たちの信頼感が裏切られていないことを感じていた。政府におかれては、どうかこの信頼感を裏切らないでもらいたい。在である。最高権力者のさらに上と切に願うばかりである。(編集委員 大野敏明)

認識が唯一絶対で全人類に普遍的な尺度であると思える。それが地球社会のなかの地域に過ぎぬキリスト教文化圏や欧米社会の特殊な価値観や認識であることをなかなか理解できない。こうして彼らは自分たちが勝手に作り上げた特殊西歐的な尺度と偏見から成る「主義」に、全世界を従わせようとして、数々の恐ろしい災いをもたらして続けたのである。

残酷な宗教戦争の歴史がそうであり、ナチズムや共産主義の侵略、抑圧、戦争の歴史がそうであった。彼らは、神聖な「主義」の名において粛清、虐殺、破壊をもあえてしてきたのである。それが主観的にはどんな崇高な理想や善意、正義感に基づくものであったにせよ、こうした「主義」による布教と救済は、世界の他の地域に住む人々、考え方を異にする人々にとっては、迷惑至極の話であり、残忍で非人間的な介入にほかならないものであった。

タルモンは『全体主義的民主主義の起源』という著作のなかで、宗教上の救世主義がフランス革命を経て政治上の救世主義に変化していく思想的過程を詳細に論じ、ジュゼイト教団の組織論とレーニンの前衛党組織論の類似性を指摘したりしているが、いずれにせよ欧米社会の「主義」信仰は容形を変えながら連綿と続いてきたのである。



【視点】昭和55年2月末、長崎県豊後市で、漁民が魚を食い荒らすイルカを捕獲し、網で囲っていたところ、動物愛護団体の米国人男性が網を切ってイルカを逃がすという事件が起きた。日本の法を破ったにもかかわらず、当時の新聞記事は米国人を「さん」づけで呼ぶなど、正義が米国人の側にあるかのような書き方だった。香山健一氏は米国人の独善的な正義感を批判し、法治国家の日本が犯罪者として厳しく扱うよう求めた。米国人は同年5月、長崎地裁佐世保支部で懲役6月、執行猶予3年の有罪判決を受けた。近年、動物愛護団体「シー・シェパード」による日本の調査捕鯨船への妨害行為が相次いでいる。今でも通用する香山氏の正論である。(石)

学習院大教授 香山健一 昭和55年3月10日掲載

「主義」は異端と正統の争いを産み、やがて分裂してさまざまな変種、亜種を産み出す。「大主義」は「中主義」「小主義」に細分化され、実質的に相対化されていく。欧米人もやがてこの事実が気がつくようになり、祭政の分離と宗教上、政治上の多様性を承認し、その共存を受け容れるようになる。イデオロギーの終焉という議論がなされているように、これからの地球社会の平和と安定のためには、欧米人が「主義」の押しつけという思い上がり、それはアメリカ式民主主義の画一的押しつけにも共通する一を根本的に反省し、世界の多様性を認め、人間の生き方、考え方、尺度などの多様性を尊重する態度をもっと身につけることが必要である。

日本漁民への配慮無し

ケイトが恐ろしくは善意と正義感で漁民の網を破ったことは疑いない。だが、この視野の狭い「イルカ主義者」は、この「主義」への狂信のあまり、イルカに食われる気の毒な魚類のことも眼中になければ、大量のイルカの来襲によって生活を脅かされる日本漁民への配慮も持ち合わせてはいなかった。「イルカ主義者」は自分たちが牛を大量に殺した上でビフテキに舌つづみを打っていることも忘れて、「クジラ愛好家」「クジラ主義



10年前のきょう

信頼のキャッチボール(7月2日=1面など) 小泉純一郎首相とブッシュ大統領による初の日米首脳会談がワシントン近郊のキャンプデービッドで開かれた。両首脳は「揺るぎない同盟」の柱となる安全保障について、戦略対話の開始で合意した。会談後、ブッシュ大統領からプレゼントされたボールでキャッチボール=写真(共同)。日米のメディアが大きく取り上げ、両国の信頼の絆がクローズアップされた。

次代への

悪童からこう言われたことがあった。新平少年はかつて「謀反人の子!」。新平少年はかつて悪童からこう言われたことがあった。彼が生まれる十数年前、徳川幕府による洋学者弾圧事件「蛮社の獄」に連座し(文化部編集委員 関厚夫)

者が潜水艇で爆薬を仕掛けて捕鯨船を撃沈しようとしたとして米連邦捜査局(FBI)によって逮捕された事件が報じられている。昨年七月十九日の各紙には、クジラ保護団体のチャーター船がホルトガル沖で捕鯨船に体当たりを強行した事件が報道されている。この体当たりされた捕鯨船は今年二月にリスボン港で反捕鯨団体「シー・シェパード」によって爆破、沈没させられているのである。主義に固執しない日本人 古来、日本人は「主義」に固執しない性格を持っているが、これはむしろ「イルカ主義者」や「クジラ主義者」に見習わせなければならない優れた特質である。かつて、勝海舟は『氷川清話』のなかで「主義にこだわるなかれ」と論じ、沢庵禅師もまた『不動智神妙録』のなかで、「本心は水、妄想は氷」として心を絶えずとらわれぬ水の状態に保つべきことを教えている。「主義」に固執する心の病からの解放-日本はこのことを控え目に、しかし自信を持って説き続けていかねばならない。(こうやま けんいち)

昭和正論座 好評発売中 「昭和正論座」 発行・産経新聞出版 定価1890円

日本画、油彩、水彩、リトグラフ、シルクスクリーン、陶磁器、西洋アンティーク、その他美術品全般 絵画 初めてでも安心! 査定・出張無料 『夜会』開催決定!! みゆ 中島みゆき 2 夜会 Vol.17 2